

# 無性の布施積

——『大乘莊嚴經論』無性積の和訳——

矢板 秀 臣

## 序

本稿は、『大乘莊嚴經論(Mahāyānasūtrālamkāra. 以下 MSA)』において説かれる布施(dāna)の思想を研究する一環として、同経第 16 章に対する無性(Asvabhāva)の注釈書(Mahāyānasūtrālamkāraṭīkā. 以下 MSAT)に注目し、同章の中で布施が詳しく説かれている箇所について、無性積の和訳を提示するものであり、安慧(Sthiramati)の注釈書(Mahāyānasūtrālamkāravṛttibhāṣya. 以下 MSAVBh)を扱った前稿<sup>1</sup>に続くものである。

MSA 第 16 章 Pāramitādhikāra(度摂品)は、六波羅蜜(布施、戒、忍辱、精進、静慮、智慧)を詳説する、きわめて重要な章である<sup>2</sup>。そこでは六波羅蜜それぞれが、次の十項目を基準として詳しく説明されている。即ち、<sup>(1)</sup>数(samkhyā)、<sup>(2)</sup>相(lakṣaṇa)、<sup>(3)</sup>次第(anukrama)、<sup>(4)</sup>解釈(nirvacana)、<sup>(5)</sup>修習(bhāvanā)、<sup>(6)</sup>差別(prabheda)、<sup>(7)</sup>包摂(samgraha)、<sup>(8)</sup>所治(vipakṣa)、<sup>(9)</sup>功德(guṇa)、<sup>(10)</sup>相互決定(anyonyaviniścaya)、という十項目である。<sup>3</sup>

これら十項目が六波羅蜜それぞれについて説かれる中、本稿では、前稿と同様、布施波羅蜜について、特に重要と思われる第六の<sup>(6)</sup>差別(prabheda)と第九の<sup>(9)</sup>功德(guṇa)、の箇所を扱うものである。

六波羅蜜について考察するところの、上掲の十項目のうちの第六、<sup>(6)</sup>差別

<sup>1</sup> 矢板 2022 参照。

<sup>2</sup> 六波羅蜜について、筆者は以前には『菩薩地(Bodhisattvabhūmi, = BBh)』を中心に研究してきた。『菩薩地』第 9 章「施品(Dānapāṭala)」、第 11 章「忍品(Kṣāntipāṭala)」、第 12 章「精進品(Vīryapāṭala)」、第 13 章「静慮品(Dhyānapāṭala)」、第 14 章「慧品(rajñāpāṭala)」につき、原典研究に基づいたサンスクリットテキストと和訳とを提示したものが、順に、矢板 2008、矢板 2019、矢板 2020、矢板 2011、矢板 2021、である。

<sup>3</sup> Cf. MSA XVI v1: samkhyātha tallakṣaṇam ānupūrvī niruktir abhyāsaguṇas ca tāsām / prabhedanaṃ samgrahaṇam vipakṣo jñeyo guṇo 'nyonyaviniścayaś ca // (長尾 2009 p.9)

(prabheda)は第 17 偈から第 28 偈までで扱われ、布施の差別(prabheda)については第 17 偈と第 18 偈で説かれ、次の六つの概念を設定して布施の特徴を考察する。六つとは、本質(svabhāva)、因(hetu)、果(phala)、働き(karman)、結合(yoga)、生起(vṛtti)の六である。これらのうち、無性積では、布施の因、果、働き、結合について考察されている。

次に、同じく十項目のうちの第九、<sup>(9)</sup>功德(guṇa)が第 36-70 偈で扱われる。六波羅蜜それぞれに、广大性(audāryatva)、無貪欲性(anāmiṣatva)、大義性(mahārthatā)、不滅性(akṣayatā)、という四つの功德があるとされる。布施の四功德を説くのが第 36 偈である。無性積では、上掲の四功德が説かれている同偈の第一句、第二句、第三句、第四句が引用され、そして注解されている。

第 43 偈においては、布施の優れた功德(guṇa)が説かれる。無性積では、同偈の言葉と世親積の言葉を駆使しつつ、菩薩の布施・慈愛の特性が説かれる。乞い求める人が物を得たい希望よりも、その望みを叶えたいという菩薩の希望のほうが大きく、乞い求める人が物を得た喜びよりも、それを実現できた菩薩の喜びは、はるかに大きいのである。

第 52 偈では、最高の布施が説かれる。布施の八種の要素が最高であることにより、布施は最高である、という。八種の要素とは、<sup>(1)</sup>依所(aśraya)、<sup>(2)</sup>事物(vastu)、<sup>(3)</sup>動因(nimitta)、<sup>(4)</sup>廻向(pariṇāmana)、<sup>(5)</sup>原因(hetu)、<sup>(6)</sup>智(jñāna)、<sup>(7)</sup>福田(kṣetra)、<sup>(8)</sup>依拠(niśraya)、である。例えば、「<sup>(9)</sup>動因(nimitta)である]悲愍(karuṇā)によりなされる布施は最高の布施である。悲愍によりなされる布施は他の[いかなる]布施よりも優れている」<sup>4</sup>という如くである。

以下の和訳において、大乘莊嚴經論(MSA)偈の語は厚字で、世親積(MSAVBh)の語は下線で表示されている。<sup>5</sup>

<sup>4</sup> 本稿後出の、第 52 偈無性積の冒頭。

<sup>5</sup> 前稿と同様に本稿は、長尾雅人博士による徹底した研究、即ち、長尾 2009 に大いに基づいている。博士はそこで、MSA、世親積(MSABh)の原文と和訳を提示し、さらに安慧と無性の両注釈(MSAVBh と MSAT)とを十分に参照されている。思想的にはすでに解明されているのであるが、布施思想の重要性に鑑み、安慧積に続き、ここに無性積の和訳を提示するものである。なお、矢板 2007 は、『大乘莊嚴經論』供養品(Pūjasevāpramāṇādhikāra)に対する安慧積の部分訳である。

## 参考文献及び略号

## &lt;一次文献&gt;

- BBh Bodhisattvabhūmi.
- D sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka. 『デルゲ版チベット大蔵経 東京大学文学部所蔵』.
- P Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka. 『影印北京版西藏大蔵経』
- MSA Mahāyānasūtrālamkāra. See 長尾 2009.
- MSA<sub>Tib</sub> D No. 4020, P No. 5521.
- MSABh Mahāyānasūtrālamkārabhāṣya (Vasubandhu). See 長尾 2009.
- MSABh<sub>Tib</sub> D No. 4026, P No. 5527.
- MSAVBh Mahāyānasūtrālamkāravṛttibhāṣya (Sthiramati). D No. 4034, P No. 5531.
- MSAT Mahāyānasūtrālamkāraṭīkā (Asvabhāva). D No. 4029, P No. 5530.
- Tib Tibetan translation.

## &lt;二次文献&gt;

- 長尾 2009 長尾雅人『「大乘莊嚴経論」和訳と註解 — 長尾雅人研究ノート — (3)』長尾文庫。
- 矢板 2007 矢板秀臣「菩薩の悲(karuṇā)—『大乘莊嚴経論』安慧釈和訳—」(成田山仏教研究所紀要 第 30 号, pp. 103-153)。
- 矢板 2008 同「菩薩の布施—『菩薩地』布施品の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第 31 号, pp. 157-207)。
- 矢板 2011 同「菩薩の瞑想—『菩薩地』静慮品の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第 34 号, pp. 79-105)。
- 矢板 2019 同「菩薩の忍—菩薩地『忍品』の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第 42 号, pp. 31-61)。
- 矢板 2020 同「菩薩の精進—菩薩地『精進品』の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第 43 号, pp. 27-50)。
- 矢板 2021 同「菩薩の智慧—菩薩地『慧品』の研究—」(成田山仏教研究所紀要 第 44 号, pp.19-35)。
- 矢板 2022 同「安慧の布施積 — 『大乘莊嚴経論』安慧釈の和訳 —」(成田山仏教研究所紀要 第 45 号, pp.19-32)。

## 無性釈和訳

(MSA XVI vv.17-18)<sup>6</sup> <MSAT D 120b3~ ; P 135b4 ~>

「無貪等と共に生じた意思が[布施の]因<sup>7</sup>である」とある[ように]<sup>8</sup>、無貪、不瞋恚(\*adveṣa)、不邪見(\*amoha)[という三つの善根]と共に生じた意思(cetanā)が、[布施の]因(hetu)である。この因[即ち、これらの三善根]が布施(dāna)[という行い]を起こすのである。

『五処経(Pañcsthānasūtra)』にあるように<sup>9</sup>と[世親釈(MSABh)に]言われているのは、

「他者に食べ物布施することによって、五処が獲得される。[五処とは]即ち、寿命(āyus)、色相(varṇa)、力(bala)、安楽(sukha)、弁才(prati-bhāṇa)の卓越である」<sup>10</sup>

と説かれているように、ということであり、これら五処が[布施の]結果(phala)である。

「[自他の]両者を繞益(= MSA v.17d<sup>1</sup>: dvayānugraha-)とは、自己と他者とを繞益するということである。[大菩提を]円満する[布施](= MSA v.17d<sup>2</sup>: -pūrakam)とは、大菩提への資糧を円満させることであり、これが[布施の]働き(karman)である」<sup>11</sup>。

「それ(=布施)は吝嗇でないことを具備する(= MSA v.18a: amātsaryayutaṃ tac ca)」とは、[布施は]吝嗇の無い衆生において存在し、これが[布施の]結合(yoga)であ

<sup>6</sup> MSA vv.17-18: pratipādanam arthasya cetanā mūlaniścītā/ bhogātmabhāvasaṃpattī dvayānugrahaṃpūrakam// ||17|| amātsaryayutaṃ tac ca dattaṃ dharmāmiṣābhaye/ dānam evaṃ pariñāya pañḍitāḥ samudānayet// ||18|| 「(1)ものを[人に]付与すること、(2) [善]根を抛り所として[生じる]意思、(3) [ものの]享受[の卓越]と身体[の卓越]、(4) [自他の]両者を饒益し[大菩提を]円満させる[布施]、(5)吝嗇でないことを具備[する布施]、(6)法と財物と無畏[の三施]を以てそれ (=布施) が与えられる。智者はこのように布施を熟知して必ずや[布施を]完成させるのである」。

<sup>7</sup> 序文に記したように、布施の特徴が、布施の本質(svabhāva)、因(hetu)、果(phala)、働き(karman)、結合(yoga)、生起(vrtti)という六つの概念を通して考察される。無性釈では以下にあるように、これらのうち、因、果、働き、結合が指摘される。

<sup>8</sup> = MSABh ad v.17b: alobhādisahajā cetanā hetuḥ. Cf. 長尾 2009 p.35,23.

<sup>9</sup> Cf. MSABh ad v.17c: bhogasampattir ..... āyurādisaṃgrhitā phalaṃ Pañcsthānasūtravaṭ. (長尾 2009 p.35,23-24.)

<sup>10</sup> Cf. 長尾 2009 p.36-37.

<sup>11</sup> Cf. MSABh ad v.17d: svaparānugraho mahābodhisambhāraparipūriṣ ca karma. (長尾 2009 p.35,24-25.)

る<sup>12</sup>。

「法と財物と無畏を以って[布施が]見られる」(v.18b: dattaṃ dharmāmiṣābhaye)と  
いう<sup>13</sup>。(D120b7, P135b8)

(MSA XVI v.36)<sup>14</sup> <MSAT D 123a6~ ; P 138b5 ~>

[第 30 偈から 35 偈で六波羅蜜の対治(vipakṣa)<sup>15</sup>の]種別(vibhāga)を説いた後、[こ  
れより六波羅蜜の]功德(guṇa)の項である。

布施(dāna)等の六波羅蜜それぞれに四種の功德(guṇa)がある。四種の功德(guṇa)  
とは、广大性(audāryatva)、無貪欲性(anāmiṣatva)、大義性(mahārthatā)、不滅性(akṣayatā)  
である<sup>16</sup>。

そのうち、初めに、布施波羅蜜の广大性(audāryatva)が説かれる。どのようにか  
と云えば----

「仏陀の子(=菩薩)たちは、求める者に出会えば自分の命さえ  
も、いつでも施捨する」(= MSA v.36a: tyaktāṃ buddhasutaiḥ svajīvitam  
api prāpyārthinaṃ sarvadā.)

と、このようにである。

<sup>12</sup> Cf. MSABh ad v.18a: amātsaryaṇa yogah, amatsarisu vartate. (長尾 2009 p.35,25.)

<sup>13</sup> 無性積には続いて、... éses bya ba 'i bdun pa ni (P om. ni.) gsum pa 'i don yin no とあり、こ  
この処格(Locative)は具格(Instrumental)の意味だという。Cf. 長尾 2009 p.37.

<sup>14</sup> tyaktāṃ buddhasutaiḥ svajīvitam api prāpyārthinaṃ sarvadā kāruṇyāt parato na ca pratikṛit  
neṣṭāṃ phalaṃ prārthitam/ dānaiva ca tena sarvajānatā bodhitraye ropitā dānaṃ  
jñānaparigraheṇa ca punar loka 'kṣayaṃ sthāpitam// ||36|| 「仏陀の子(=菩薩)たちは、求め  
る者に出会えば自分の命さえも、いつでも施捨するが、[それは菩薩たちの]慈愛からであり、  
他者からの報恩があるわけではなく、また望ましい果報を欲するものでもない。この布施に  
よってこそ、一切の人民(jānatā)が、三[乗、即ち声聞乗、独覺乗、大乘]の菩提へと育まれる  
のである。また布施というのは、智慧が包摂することによって、この世に不滅のものとして  
存在するのである」。

<sup>15</sup> 序文に記したように、MSA XVI (大乘莊嚴經論 第 16 章)において六波羅蜜が十の項目に  
ついて解説されるが、その十の項目のうちの第八が対治(vipakṣa)である。この後に説かれる  
功德(guṇa)はその第九である。

<sup>16</sup> Cf. 長尾 2009 p.58, n.1. Cf. MSA v.42: audāryānāmiṣatvaṃ ca mahārthākṣayatāpi ca/  
dānādīnāṃ samastāṃ hi jñeyam guṇacatuṣṭayam// 「广大性、無貪欲性、大義性、不滅性が、  
布施等[六波羅蜜それぞれ]にある、まとめて四種の功德であると、知るべきである」。Cf.  
MSABh ad v.42:「この中、[第 42 偈の]第一句によって布施等[六波羅蜜]の广大性が説明され、  
第二句によって無貪欲性が、第三句によっては、大なる衆生利益を実現するので、大義性が、  
そして第四句によって不滅性が[説明された]。このように、これら[六波羅蜜それぞれ]の四  
種の功德が、これら[第 36 偈から 第 41 偈]の[六]偈によって理解されるべきである」。 (Cf.長  
尾 2009 p.65-66, 矢板 2022 p.25.)

自分の命を布施すると宣言した者は、いかなる外的事物をも[布施するもの]である。それはちょうど、以前、Ma khol gyi ʒal 師が<sup>17</sup>「自分の肉体さえも施捨する者は、況んや外的事物をも[施捨するの]である」と説いたようにである。

自分の命を決して施捨しないにも拘らず、[自己の生存を]望む者(A)が、[そのために相手 B の]命を望んでいる時に、[相手 B が]躊躇なく[自身の肉体を]布施するのである。自己の命の布施とは、[体の]部分でも細部でも布施するのに躊躇しないことである。これらは、布施の重要性を述べている。

「それは菩薩たちの]慈愛からであり、他者からの報恩があるわけではなく、また望ましい果報を欲するものでもない」

(= MSA v.36b: kārūṇyāt parato na ca pratikṛtir neṣṭāṃ phalaṃ prārthitam.)

という。これが布施の[四種の功德のうちの第二である]無貪欲性(anāmiṣatva)を説いている。慈愛(karūṇā)から発せられた[心]連続を起こす者達は、自分の命をも布施するが、彼らは[何の]見返りも期待しないし、[その]業果としての[来世での]自在主(iśvara)等[での生誕]を望んだりはいしない。もし[人が]一つの布施に見返りや業果を期待すれば、その布施者は愛欲(trṣṇā)を本性とする者である<sup>18</sup>。それを本性とする布施は、輪廻に落ちるべき過失あるものであり、その者は菩薩の[仮の]衣をまとっている[だけの]ものである。そういう者と逆が無過失の者である。

これら二つの根本[、即ち、布施するにあたって見返り、そして業果を期待しないこと]は、慈愛(karūṇā)により獲得されているものであるから、布施の無貪欲性(anāmiṣatva)と言われる。

「この布施によってこそ、一切の人民が、三[乗、即ち、声聞乗、独覺乗、大乘]の菩提へと育まれるのである。」(= MSA v.36c: dāṇenaiva ca tena sarvajānatā bodhitraye ropitā.)

という。これが、布施の[四種の功德のうちの第三である]大義性(mahārthatā)を説いている。一切の人民が[菩薩の布施により]相応に三乗[の悟り]へ育まれるからである。[三乗の中の]或る乗は除かれ、[万民の中の]或る衆生は除かれる、というのであれば、大義とはならないから、「一切の人民(jānatā)が」と言うのであり、「三乗(\*triyāna)」と言うのである。

<sup>17</sup> 不明。長尾博士も「何人であるか不明で、甚だ疑わしい」とされている。長尾 2009 p.58,n.2.

<sup>18</sup> MSAT: sred (D: srid) pas bdag gir byas pa yin no.

「[布施というのは、智慧が包摂することによって、]この世に  
不滅のものとして存在するのである」 (= MSA v.36d: dānaṃ jñāna-  
parigraheṇa ca punar loke 'kṣayaṃ sthāpitam.)

という。これにより、布施の[四種の功德のうちの第四である]不滅性(akṣayatā)が説かれている。どうしてか?。諸衆生が布施するのと同じように、もし菩薩(bodhisattva)もそのように布施を行えば、自在(īśvara)、天(\*svarga)、妙色(\*abhirūpa)等を本性とするから、輪廻(saṃsāra)に墮する。これは異熟果(vipāka)の破滅である。声聞(śrāvaka)と同様に、輪廻を恐れ輪廻に背を向けつつ、涅槃(nirvāṇa)を希求し悟るために行っているこの布施は、無余依涅槃(nirupadhiśeṣanirvāṇa)の破滅である。従って、諸菩薩はこれら二者[即ち、異熟果の破滅と無余依涅槃の破滅と]を否定し、無分別智(nirvikalpajñāna)に基づいて護念して布施をなすのである。かくのごとく[菩薩の布施は]輪廻と涅槃に依存しないから、「不滅である(akṣayatā)」と言うのである。

戒[波羅蜜]などについても[布施波羅蜜と]同様に考えるべきである。(D124a3, P139b3)

#### (MSA XVI v.43)<sup>19</sup> <MSAT D125a6~; P141a2~

[菩薩の]悲(karuṇā)は衆生を見捨てず、従って、声聞のように涅槃を追い求めることはない。[菩薩は]無分別智によって世俗衆と共に輪廻界に在って変わらないから、これ[即ち菩薩の悲]は不滅なのである。このように[菩薩は]輪廻界に[在り]そして涅槃に入らないから、その智は無余依涅槃(nirupadhiśeṣanirvāṇa)の中にあつて不滅である。菩薩の無余依涅槃は<sup>20</sup>、応化身(nirmāṇakāya)として現れるものである。

<sup>21</sup>[布施を求める]乞求者(yācanaka)には布施者との出会いによって喜び(tuṣṭi)があり<sup>22</sup>、[その]出会いにより望みが円満しての喜びがある<sup>23</sup>。また、乞求者が布

<sup>19</sup> darśanapūraṇaṭuṣṭiṃ yācanake 'tuṣṭiṃ api samāśāstim/ abhibhavati sa tāṃ dātā krpālur ādhikyayogena// ||43|| (長尾 2009 p.66.) 「[物を]乞い求める者には、[施者と]出会って[物を得て]満足して喜ぶこと、また[それが叶わず]喜べないこと、また[施者と出会って満足したいとの]希望がある。そういうものを、慈悲深い施者は、[慈悲の]優越性をもって乗り越えている」

<sup>20</sup> D: ... mya ṇan las 'das pa 'i ni, P: ... mya ṇan las 'das pa ni.

<sup>21</sup> 以下について、cf. 長尾 p.67, n.5.

<sup>22</sup> Cf. MSABh ad 43: yācanake hi jane dāyakadarśanāt, ... (長尾 2009 p.66,16.)

<sup>23</sup> Cf. MSABh ad 43: tataś ca yathepsitaṃ labdhvā manorathaparipūranād yā tuṣṭir utpadyate, ...

施者と出会えなければ喜ばず、そして乞求者の望みが円満しないので喜ばず<sup>24</sup>、しかし乞求者には[布施者と出会いたいという]希望はあり、布施者に出会って望みを円満させたい希望がある<sup>25</sup>。

[このような]喜びと喜ばないことと希望という、これらすべてを、慈悲深い菩薩は、偉大なる慈愛によって乗り越えている<sup>26</sup>。菩薩の広大な慈愛により、[布施者に]乞求者(yācanaka)が出会い、彼の望みが円満するから、乞求者に大きな喜びがある。また、菩薩に乞求者が出会えないと、乞求者には、彼の望みを円満させる大きな喜びは無い。しかし菩薩にも、乞求者に会いたいという希望があり、[菩薩の]彼(乞求者)の望みを円満させたい希望は、乞求者[の希望]よりずっと大きい。だから、「乗り越えている(abhibhavati. <v.43c'>)」のである。これは布施波羅蜜(dānapāramitā)の優れた功德であり、これが[この第 43 偈]一偈によって示されている。(D125b5, P141b1)

(MSA XVI v.52)<sup>27</sup> < MSAT D 126a7~ ; P 142a6~ >

「<sup>(3)</sup>動因(nimitta)は、悲愍(karunā)である」という<sup>28</sup>。悲愍によりなされる布施は最高の布施である。悲愍によりなされる布施は他の[いかなる]布施よりも優れている。

「<sup>(5)</sup>原因(hetu)は、以前に[行じた]布施波羅蜜の修習の薫習である」という<sup>29</sup>。他生における無貪(alobha)等の[三]善根(\*tri-kuśalamūla)と結合した心を修練することにより薫習する。その薫習(vāsanā)の力によって布施等の波羅蜜を起こさせる。これが原因(hetu)であり、従って最高とされる<sup>30</sup>。

(長尾 2009 p.66,16-17.)

<sup>24</sup> Cf. MSABh ad 43: atustiś cādarśanād aparipūranāc ca. (長尾 2009 p.66,17.)

<sup>25</sup> Cf. MSABh ad 43: āśāstiś ca taddarśane manorathaparipūrane ca. (長尾 2009 p.66,17-18.)

<sup>26</sup> Cf. MSA v.43cd: abhibhavati sa tām dātā kṛpālur ādhikyayogena; MSABh ad 43: ato dātā kṛpālus tām sarvam abhibhavaty ādhikyayogāt. (長尾 2009 p.66,19.)

<sup>27</sup> āśrayād vastuto dānaṃ nimittāt pariṇāmanāt/ hetuto jñānataḥ kṣetrān niśrayāc ca paramatam// ||52|| (長尾 2009 p.75,10-11.) 「布施は、<sup>(1)</sup>依所(āśraya)により、<sup>(2)</sup>事物(vastu)により、<sup>(3)</sup>動因(nimitta)により、<sup>(4)</sup>廻向(pariṇāmana)により、<sup>(5)</sup>原因(hetu)により、<sup>(6)</sup>智(jñāna)により、<sup>(7)</sup>福田(kṣetra)により、<sup>(8)</sup>依拠(niśraya)によって、最高であると考えられる」。

序文にも記したように、これら、<sup>(1)</sup>依所(āśraya)から<sup>(8)</sup>依拠(niśraya)までの、布施の八種の要素が最高であることにより、布施は最高である、という。

<sup>28</sup> = MSABh ad v.52: nimittam karunā. (長尾 2009 p.75,13.)

<sup>29</sup> = MSABh ad v.52: hetuḥ pūrvadānapāramitābhyāvāsānā. (長尾 2009 p.75,14.)

<sup>30</sup> 安慧積にも次のようにある：「他生における無貪(alobha)等の三善根(\*tri-kuśalamūla)により心を修練した者が、布施等の所行を修習し、その流れが薫習して残る。その薫習(vāsanā)が



[前述のように]悲愍(karuṇā)を動因(nimitta)とする布施であり、動因という言葉では[悲愍が]「最高[の動因]」と言われるのである。布施波羅蜜は薫習によるから、「原因(hetu)」という言葉では、[薫習が]「最高[の原因]」と言われるのである。

原因(hetu)と動因(nimitta)にはどういう相違があるのか、というなら、原因(hetu)は独自の因であり、例えば、[花の]芽に対しては[花の]種子[が原因である]ようにである。[一方、]動因(nimitta)は助力(\*sahakārin)の因であり、例えば、[花の]芽なら、それを作り出すための土や水などのようなものである。このように<sup>31</sup>、布施等の善行の修習の薫習が原因(hetu)であり、独自の因なのである。悲愍は助力の因[、即ち、動因(nimitta)]である。[花の芽を作り出すための]土や水などのように。

「<sup>(7)</sup>福田(ksetra)は五種である。即ち、求める者、苦しむ者、依所の無い者、悪行を行う者、有徳者である」という<sup>32</sup>。無分別智(nirvikalpajñāna)によって認識するのであれば、布施者と布施物と受者を分別しないのであり、[それらのうちのどれかを]「優れた布施だ」と直ちに言うことはない。<sup>33</sup>このようにこれは布施波羅蜜を円満具足しない状況であれば、凡夫(prthagjana)は状況に不満であろう。分別しない状況は、布施波羅蜜を円満具足している状況であり、そういう場合には、いかなる乞求者(yācanaka)にも布施しているのである。[布施]物等を分別する状況でも、菩薩が赤貧者(dāridrya)である状況であれば、すべての乞求者に布施[物]を布施することができる、ということは[正しく]なく、それは無分別智によって[可能]である。布施者と布施物と受者に執着することはなく、執着は滅するから矛盾はない。

信解(adhimukti)と思惟(manaskāra)と三昧(samādhi)[に<sup>(8)</sup>依拠(niśraya)すること]によって、最高の布施となると考えられる<sup>34</sup>。

信解によってどうするのか、と言えば、布施波羅蜜を[説いて]いるすべての経典を最大限の意樂(\*āśaya)によって信解するのである。

思惟によってどうするのか、と言えば、賞味(\*āsvāda)の思惟により波羅蜜を行

布施波羅蜜(dānapāramitā)を起こさせる」(MSAVBh ad v.52, 矢板 2022 p.30)。

<sup>31</sup> MSAT: de ltar na graṅs bžin du ... この後半部(graṅs bžin du)は筆者には意味不明。

<sup>32</sup> = MSABh ad v.52: ksetram pañcavidham. arthī dukkham niḥpratisarano duścaritacārī guna-vāms ca. (長尾 2009 p.75,15-16.)

<sup>33</sup> 無性積ではここに、da ni don la sogs par rnam par rtog pa'i phyir ji ltar sṅa phyi mi 'gal ze na 'gal ba me do という文章があるが、筆者には理解困難なため、ここに訳出していない。

<sup>34</sup> Cf. MSABh ad v.52: niśrayas trividho yaṃ niśritya dadāti, adhimuktir manasikārah samādhiś ca. (長尾 2009 p.75,17-18.) 「それに依拠して布施する、それが<sup>(8)</sup>依拠(niśraya)であり、三種ある。即ち、信解、思惟、三昧[の三]である」。

じた者たちの功德を見いだす仕方でも賞味し<sup>35</sup>、随喜(anumodana)の思惟により全世界の全ての衆生に布施することに随喜し<sup>36</sup>、さらに、希望(abhinandana)の思惟により自己と衆生たちの未曾有の特殊な波羅蜜を称讃する<sup>37</sup>。

三昧に依拠することにより最高の布施となる。三昧は虚空蔵[三昧]などである<sup>38</sup>。即ち、第八地等[を行じて]いる菩薩が、無行(anabhisamkāra)[般涅槃]の道にあって虚空蔵[三昧を行じ]つつ、あれこれの目的をもって、正に虚空の中からあらゆるものを布施し、虚空蔵等の三昧の多種性を示す<sup>39</sup>。「まさにそこで自在性(vibhūtvā)として説かれた通りである」<sup>40</sup>と[世親]にあるが、これはどういうことか？。修習(bhāvanā)の分類による。どういうことかと言えば、[以前に]「自在性による波羅蜜の修習には三種類ある。即ち、身体の自在性、行動の自在性、そして説法の自在性である」<sup>41</sup>と説かれている。そのうち、身体の自在性は、如来には自性的な[身体]と受用的な[身体]という二種の身体があることと考えるべきであり<sup>42</sup>、この二つの身体はあらゆる白淨法(śukladharma)の集合である。白淨法の集合であるが、三昧の語により、<sup>43</sup>虚空蔵三昧(gaganagañjasamādhi)等のことである。

このように、三昧に依拠しているから、最高の布施であると考えられる。

「これこれの種類ある布施、これが布施である」と[世親]に言われる<sup>44</sup>。[布施が]依拠するところの信解(adhimukti)と思惟(manaskāra)と三昧(samādhi)の[三者による]相違・特性があると知るべきである。

(D127b2, P143b1)

<sup>35</sup> 安慧積には次のようにある：「以前、布施等の波羅蜜を行じた後に、『私が以前に布施を行じたのは良かった』と感じるのが、賞味(āsvādāna)である」(MSAVBh ad v.52, 矢板 2022 p.32)。

<sup>36</sup> 安慧積には、「十方世界の諸衆生に布施を行じた際に、心喜ぶのが、随喜(anumodana)である」とある (MSAVBh ad v.52, 矢板 2022 p.32)。

<sup>37</sup> 安慧積には、「未来に生まれるたびに布施を行じて喜び、諸衆生が未来に生まれるたびに布施を受けて喜ぶのが、希望(abhinandana)である」とある (MSAVBh ad v.52, 矢板 2022 p.32)。

<sup>38</sup> Cf. MSABh ad v.52: samādhir gaganagañjādīr yathā tatraiva vibhūtvam uktam. (長尾 2009 p.75, 19-20.)

<sup>39</sup> 安慧積には、「三昧に住すれば、八地(āṣṭamakabhūmi)等に行じる諸菩薩は、無行般涅槃(\*anabhisamkārapariṇirvāna)の道により虚空蔵三昧を行じ、[施]物を自在に虚空から受け取って[それを]施捨する」とある (MSAVBh ad v.52, 矢板 2022 p.32)。

<sup>40</sup> = MSABh ad v.52. 前々注後半参照。

<sup>41</sup> = MSABh ad v.16: vibhūtvāsamnīśrītā pāramitābhāvanā tryākārā. kāyavibhūtvatah, caryā–vibhūtvatah, deānāvibhūtvataś ca. (長尾 2009 p.34,11-12.)

<sup>42</sup> = MSABh ad v.16: kāyavibhūtvam tathāgate dvau kāyau draṣṭavyau svābhāvikaḥ sāmbhogikaś ca. (長尾 2009 p.34,12-13.)

<sup>43</sup> ここに dbaṅ 'byor ba 'i phyogs gcig bzuñ ste という語もあるが、筆者には意味不明であるため、訳していない。

<sup>44</sup> = MSABh ad v.52: yāvatprakāram tad dānam. (長尾 2009 p.75,22)